

令和4年度

北海道教育大学

附属函館幼稚園だより

NO. 14【号】



## 児童文化財の特性の区別と望ましい活用

附属函館幼稚園園長 外崎紅馬

先月、新年度に入園予定の新入園児とその保護者の方に対し「1日入園」を実施した。短い時間ではあるが、はなぐみ・つきぐみ・ゆきぐみの園児たちが、それぞれ日頃行っている歌やダンスなどをお遊戯室のステージで披露したり、歓迎の気持ちを伝えるために製作した小物を新入園児にプレゼントしたりと、普段の園での活動や取り組みについて入園前に触れてもらう貴重なひとときである。

このような行事のとき、だいたい必ず「園長先生のお話 (or あいさつ)」というのがプログラムの中に組み込まれている。そもそも私はそういうのが苦手である。だからといって、人前で何かをするのが嫌いというわけではない。「そういうの」とは、何かのときに何かしらの代表として何らかの話やあいさつをするということで、昔からそういうことにあまり前向きな姿勢や積極的な気持ちになれないのである。

なので、「1日入園」の行事を担当している先生に泣きつき、あいさつとかではなく、紙芝居をさせてもらえないかと土下座をする勢いで頼みこみ、どうか了承を得た。その後は、実演する紙芝居を選定し、来るべき日に備えて1日30分程度ではあるが1週間ほど毎日欠かさず練習を重ねた。

そうして迎えた本番である。以前にも思ったが、お遊戯室でソーシャルディスタンスを保つと、思ったほど紙芝居のサイズは大きく感じられない。そのため、子どもの集中力だけが頼りである。そのことを心配しながら紙芝居を行ったが、ちょうど正面に座っている子どもが、大きく目を見開き、まばたきすることもなく、紙芝居に真剣に見入っていた。やって良かったと思った。

紙芝居を実演しながらこうも思った。家に絵本はあっても、紙芝居がある家庭は少ないのではないかと。家で絵本の読み聞かせはしても、紙芝居を実演する家庭はあまりないのではないかと。ましてや、紙芝居の「舞台」(紙芝居を抜き差しする木枠)がある家もあまりないのではないかと。むしろあるほうが珍しいのではないかと。そう考えると、紙芝居を、舞台を使ってちゃんと観ることのできる機会は限られている。

紙芝居1枚1枚の絵は、専門用語で「平絵」と呼ぶ。「絵」と「文章」という構成要素が絵本と同じなため、その違いを区別せず、舞台を使わずに平絵を手にとって紙芝居を行う場面をたまに見かけるが、それは紙「芝居」ではなく「平絵」の読み聞かせである。「芝居」は「舞台」があってこそである。

紙芝居を、舞台を使って観る機会が限られているからこそ、きちんと舞台を使って紙芝居を実演したい。児童文化財の特性を活かし、正しく活用することの意義は大きい。